

平成 22(2010)年度 大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業 報告書



2011年3月

法政大学現代福祉学部現代福祉学科

関司ゼミナール

## 目次

### I はじめに

1. ゼミ概要
2. 調査地域概要
  - (1) 位置
  - (2) 世帯数
3. 基本データ
  - (1) 調査実施者
  - (2) 活動スケジュール

### II 活動内容

1. 現地入り前の集落の印象
2. ヒアリング調査
3. 資源発掘のための集落歩き・意見交換会
4. 夏の調査結果から見たこと
5. 集落元気塾での現地中間報告
6. 集落活性化県民討論会 in 会津

### III 今後に向けて

1. 冬の再訪問
2. まとめ—地域活性化に必要な視点

### IV おわりに

謝辞

# I はじめに

## 1. ゼミ概要

私たち法政大学図司ゼミナールは主に農山村地域の地域づくりについて学んでいる。本年度は、「限界集落」という今日の農山村地域が抱える問題について、まず現地の住民の皆さんのお話を伺いながら、現場の様子を受け止めることを大事にして、本事業を通して福島県喜多方市・板の沢集落に、さらに図司先生のつながりのある新潟県小千谷市・三興（さんこう）地区において、年間で2~3回訪問しながら活動を行った。また、東京・多摩地区にキャンパスを構えていることから、周辺地区の住民の方々へ地域をより理解してもらうための地域情報サイト「まいふれ八王子」と連携して、地元の様々な業種の方を紹介する「よっ！仕事人」というコンテンツ作りをお手伝いするなど、自ら現場に足を運びながら地域活動に取り組んでいる。

## 2. 調査地域概要

### (1) 位置

喜多方市板の沢集落は熱塩加納町合併特例区（H23.1.3 まで）に属し、熱塩加納総合支所から北西に約 11 キロの標高約 400 メートルの山合い（斜面）に位置している。集落の西斜面部には約 6ha の棚田が連なっており、冬には一面雪で覆われ美しい景観が広がる。



図1 喜多方市板の沢集落の位置

## (2) 世帯数

板の沢集落は、2010年現在、10戸の世帯数があり、35人が住む。中には8人家族で暮らしている世帯もあり、男女別では男性14人、女性21人となっている。平均年齢をみると、全体で57.7歳となっており、高齢化率も38.8%と高い。65歳以上の住民の割合が全体の半数に近づいており、今後「限界集落」となる可能性がある。10代～30代の若年層が少なく、50代以上の高齢者層が集落を担っている現状である。

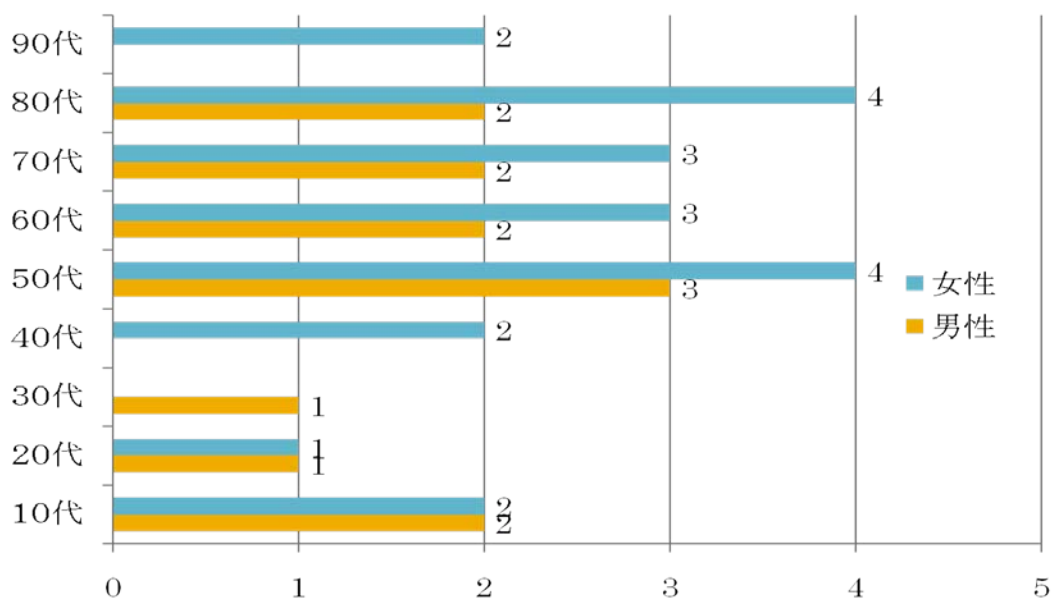


図2 板の沢集落の年代別性別分布

### 3. 基本データ

#### (1) 調査実施者

ゼミ名	法政大学関司ゼミナール
ゼミ代表者	斉京知治
ゼミ生 (2・4年生・卒業生)	2年生：小森智貴、前田康平、甲斐晃平、上坂豪、青木優、 門田なみ子、田中亜佑美、浅原千穂、川口琴美 4年生：相澤崇司、室井大輝 卒業生：紀修一
指導教員名	関司直也（法政大学現代福祉学部准教授）
調査対象集落名	福島県喜多方市板の沢集落

#### (2) 活動スケジュール

8月29日	午前：職員さんとの対面および集落概要説明 午後：集落の方との対面式
8月30日	午前：ヒアリング訪問 午後：ヒアリング訪問、まとめ作業
8月31日	午前：集落歩き、お宮掃除 午後：交流会、まとめ作業
9月1日	意見交換会
10月26日	喜多方市農山村集落元気塾で集落歩きとマップづくり
11月22日	<b>集落活性化県民討論会 in 会津</b>
2月5日	午後：集落に挨拶 夜：お宅訪問・だんご刺し体験
2月6日	午前：集落支援実践活動(雪体験・ムシロ織り見学) 午後：意見交換会&ワークショップ 夜：懇親会
2月7日	午前：集落に挨拶

## II 活動内容

### 1. 現地入り前の集落の印象

- ・福島県喜多方といえば、喜多方ラーメンくらいしか思い浮かばず、あまり多くの情報を知らないために漠然としたイメージしかない。
- ・喜多方という地名だけで殆ど情報が無かったのでどのような状況かイメージしづらかった。
- ・板の沢集落のような過疎地域の現状については通勤通学、買い物などの日常生活の過酷さがどれほどあるのか、大学の講義やメディアなどを媒体とした情報だけでは分からないので実際に現地に入って見聞きする必要があると思った。
- ・集落のイメージは山奥に点在していることから何もないだろうと思っていた。
- ・限界集落の手前までできていると聞いていたので、草木が多く太陽の光も木々で遮られるほど荒れていそうで整備がされていないのでは？
- ・集落の方々がどれほど活性化を望んでいるのか掴めない。
- ・学生にできることは一体何なのか不安であった。
- ・都会で暮らしている自分たちと違って、交通や公共施設など不便なことが多くあるのではないかと。
- ・どれほどの世代がいて、集落という場所に住む方の雰囲気もどのような人なのか不安があった。
- ・そもそも集落という場所に行くことがこれまでほとんどなくイメージが湧かなかった。



\*集落に対する学生のイメージが漠然としている。

\*集落が何を望んでいて、どのような人達が掴めない。

\*学生にできることが何なのか分からない。

## 2. 対面式・ヒアリング調査（8月29～30日）

集落に対してははっきりとしたイメージが湧かない中で、私たちゼミ生は8月29日に初めて板の沢集落を訪れた。集落に入る前に、今回の活動をサポートして頂く喜多方市役所企画政策課主任主査の佐藤義弘さんをはじめ職員の方々と対面し、集落の概況についての説明をして頂いた。



図3 職員の方との対面の様子

午後には実際に集落に入り、翌日からのヒアリング訪問に向けて、集落の皆さんとの対面式を行った。



図4 板の沢集落の皆さんとの対面式の様子

8月30日には、各班2人ずつに分かれて、午前中に5戸、午後中に4戸のお宅でヒアリング訪問を行った。ヒアリングでは、集落の歴史、集落の課題や問題点、今後集落がどの様になることを望むのかなど、集落の方との距離を縮めることを意識しながら、雑談・逸話も含めながら各班和やかにお話を聞くことができた。

## ヒアリング訪問一覧

学生班	訪問先
齊京・門田班	東条良男さん、岩橋時子さん宅
小森・田中班	田中三成さん、外島フサ子さん宅
前田・青木班	山口悌一郎さん、外島正夫さん宅
川口・上坂班	山口虎彦さん、外島正夫さん宅
浅原・甲斐班	外島英雄さん、岩橋陽一さん宅

表5 ヒアリング訪問先一覧



図6 ヒアリング訪問の様子



## <ヒアリング調査結果>

### ～プラスの考え～

#### \*生活について

- ・ 高齢と言えどもまだまだ、パワフルで元気に暮らしていける。
- ・ 今の時代において、家族別々に暮らすことが当たり前になっている中で、一緒に住んで助け合うことで家族みんなが愛情を持って生活していける。
- ・ 幼少期・少年時代に比べて交通の便は確かに悪いが、集落内の関係は良好でこのままでも十分幸せである。
- ・ 先祖からずっと住んできた家でもあるので、住み続けたい。
- ・ 大変なのは冬だけで、後はそこまで生活に苦労していない。

#### \*集落について

- ・ 集落にはずっと残りたいという考えがあり、なんとか存続してほしい。
- ・ 土手かぼちやを活用すべきである。
- ・ 春には山菜(ゼンマイ、タラの芽、キノコ類)が多く取れるのでぜひ多くの人に食べてもらいたい。
- ・ 集落の伝統料理である、こづゆは本当においしくもっとアピールできるのでは？
- ・ いくら生まれ育った土地が不便であっても愛着がある。

### ～マイナスの考え～

#### \*生活について

- ・ 集落では車が生活の中心であるために、将来運転が出来なくなったら不安である。
- ・ 跡継ぎがないことが不安であり、集落を存続させるためにも跡継ぎがいてほしい。
- ・ 冬の除雪作業が大変である。
- ・ 機会(タイミング)があれば集落を下りることも考えている。
- ・ 農産物の販売の手段としてインターネットを活用しようにも使える人が少ない。
- ・ 今は、働ける人は喜多方市におりて出稼ぎに行っている。
- ・ これからの生活に不安は特にない。
- ・ 子供がいたとしても農家を継がせる気はあまりない。
- ・ 今は、親族との付き合いは冠婚葬祭くらいである。
- ・ 今後、子供たちを集落に呼んで一緒に暮らすことは考えていない。
- ・ 家が古くなっても直そうとは思はない。(もし、ダメになったら集落を下りる)
- ・ 高齢から自分達では農業を続けることが難しく、もはや農業だけでは今の社会の変化に対応できない。
- ・ 集落に緊急車両がくるのが遅い。
- ・ 無理やり子供たちに後を継がせるのは考えていない。

### \*集落について

- ・ 集落には仕事がなく、豊富な畑が十分でないために農作物も満足にできない状態で後継者の問題もあり、自分達だけでは出荷も大変である。
- ・ 観光資源もなく交通の便が悪い為に、土手かぼちゃを売るにしても販売経路を確保できない。
- ・ 山間部特有の問題や歴史的背景の必然性(若者が集落に残っていない)からくる高齢化の波には抗えない・
- ・ 集落の一人一人で学生に対する期待の大きさや意欲が異なる。
- ・ 畑仕事は自分の代で終わらせようと思っている。
- ・ 他の集落と比べて天災の被害は少ない。
- ・ もはや農業だけでは食べていけない。
- ・ 集落内での全体的な話し合いの場が少ない。
- ・ 先祖から代々続くこの土地を簡単に捨てられない。
- ・ ひめさゆりは花が咲くまで5, 6年かかる上に育てるのが大変であり、病気や天候に左右されやすい。
- ・ 集落で畑を守る動きはあったが実際に実行されていない。
- ・ 下の代が大きく抜けてしまっている。

### ～集落の歴史・習慣～

#### \*歴史

- ・ 以前は盛んに行われていたお祭り等も今はほとんどなく、他の集落との交流がない。
- ・ 板の沢はかつて鉾山の恩恵を受けていた。
- ・ 昔は村で盆踊りなどのお祭りがあった。
- ・ 昔は養蚕、たばこ、炭焼き、杉・桐などで生計が立っていたが、時代が進みそれらの需要は減っていき、土手かぼちゃもまだ成果が出ていない。
- ・ 子供たちがいた時は、運動会などがあり、集落に活気があった。
- ・ 昔は集落でバスを借りてみんなで温泉旅行に行ったこともあった。

#### \*習慣

- ・ 年に3回(3月、7月、9月)と1月16日、旧3月13日には集落の虚空蔵様にお参りに行く習慣がある。
- ・ 新年1月4・5日には栃木県の古峰神社にお参りに行く。

### 3. 資源発掘のための集落歩き・意見交換会(8月31日～9月1日)

集落歩きでは、学生が集落のことをより理解することと同時に、**地域活性化のための資源**を学生の視点から発掘することを目的とし、現地の住民の方に案内して頂きながら、空き家や畑の農産物を見て回った。また、お宮掃除の手伝いも行った。



図7 集落歩きの様子



図8 お宮掃除の様子

午後には、集落との方との交流会を行いました。



雨が降ったので集落の方がブルーシートを用意してくれました。



図9 交流会の様子

9月1日には、今回の夏の活動のまとめとして意見交換会を行いました。

意見交換会では、

1. 改めて自己紹介、
2. 集落の方と学生がそれぞれ出会ってのお互いの感想、
3. 学生がヒアリングで印象に残った話、
4. 集落歩きで感じたこと、
5. 集落の今後を考える上で思ったこと、
6. これからの話について

の6つの項目をテーマに行われました。



図10 意見交換会の様子

#### 4. 夏の調査結果から見たこと

8月29日～9月1日の4日間の活動の中で、ヒアリング調査、集落歩き、交流会、意見交換会等を通して見えてきたことを、大学に戻りワークショップという形で集落の現状や学生が感じた課題などをまとめた。その結果、いくつかの共通するキーワードを発見することができた。



#### <集落歩きの印象>

- ・観光で若い人たちを呼び込むことは、実際厳しいのではないかと？
- ・集落におけるメインとなるようなもの(資源)がないと人は来ないよ。
- ・お米や山菜、かぼちゃ、こづゆなどは確かにおいしかったけど、まだまだ集落の魅力としては弱いのでは。さらに、棚田や山間部特有の景観はあっても、板の沢特有のものとしては不十分な気がする。
- ・空き家になってしまっている家屋をもっと活用したらどうだろうか？
- ・マイタケの栽培は印象的だった。
- ・米・野菜・空気・景色など確かに都会と比べると魅力的だが、そういった集落は日本にはいくらかでも存在すると思う。  
もっと板の沢独自の魅力を探そう。
- ・いろいろな野菜のある畑を見られるのは都会ではできない貴重な体験だったね。
- ・何もないことがある意味魅力にはならないだろうか？
- ・都会のビルやマンションに囲まれた生活と違いゆっくりと流れる時間の中で暮らす醍醐味は感じられた。

図 11 学生によるワークショップの様子

## 三つのキーワード

1つ目として、**集落内において住民の意見が異なっていて、また、お互いの考えを共有する場が少ないことが挙げられた。**人によっては、現状の生活に満足している人もいれば、不便であると考えている人もいる。集落に残りたい人もいれば、今後集落を下りることを考えている人もいる。さらに、こういった考えを知る機会としての場が少ないといった意見も出された。

2つ目として、**集落で暮らすには、生業もなく都会の人が生活することは難しいことが挙げられた。**かつては鉱山があった頃は、下の部落も残っていたこともあり仕事として成立し、養蚕業やたばこ、お米などの産業でも生計を立てられた。しかし、時代の変化と共に衰退し、後継者もいない中で、いまでは、鉱山もなくなり、農産物だけでは暮らしていけないのが実情である。また、交通の便や冬の除雪作業も大変で、集落の魅力も特に無いので、若い人を呼ぶには厳しいのではという集落の意見が出された。

3つ目は、**かつてのお祭りの復興をしてはどうか**ということである。昔は、周辺の集落同士での祭りや集落での花火大会、盆踊り、運動会など村は活気に満ちていた時期が確かにあった。そういった行事で結ばれる集落同士の関係、住民との関係は今よりもあったのではないだろうか。

若い世代が抜けてしまった現在では、冠婚葬祭の仏事や年に数回の定期的な集まりだけが主になってしまっているので、学生の力も借りて復活してはどうか。

このように大きく3つのキーワードが調査の結果として浮かび上がった。私たちはこれを軸にして、集落の為にできることはないだろうか と議論を進めた。

そこで考えられたのは、「果たして集落に魅力がないのだろうか？学生の視点から捉えた場合にまだまだ発見されていないものがみつかるのではないか？」ということであった。今回の夏の活動で得られたものを基に、私たちはさらに、ワークショップを進め、板の沢の魅力を一つの形にすることにした。それが次の「板の沢マップ」である。これは夏の集落歩きを通して、学生がこれはもっとアピールしてもいいのではないかと感じたものをまとめたものである。



図 12 板の沢マップ



様々な集落の資源

ひめさゆり



防火栓



椎茸の栽培



防火水槽



火の見やぐら



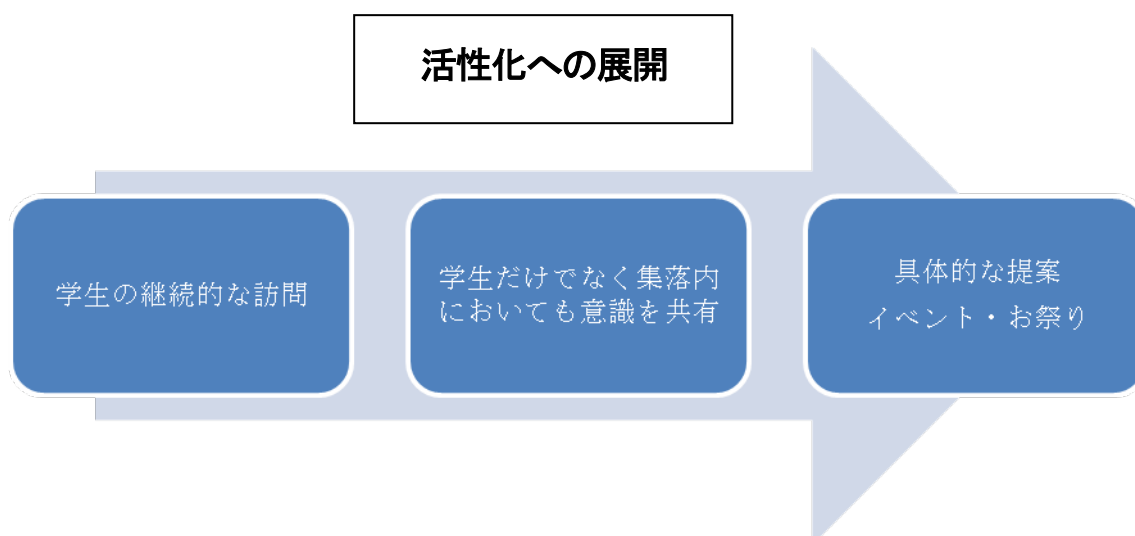
板の沢土手かぼちゃ

## 5. 集落元気塾での現地中間報告(10月26日)

10月26日には学生から2名が、板の沢集会所で開催された「集落元気塾」において中間報告を行った。元気塾では、集落や塾生の皆さんに聞いて頂き、学生が再度訪問することによって、学生と集落の方との信頼関係をより深め、間にある壁をなくしながら、一つの目的に沿った意識を共有することが大切であり、そこで初めて具体的な提案を出せることが確認できた。



図13 集落元気塾の様子





## 6. 集落活性化県民討論会 in 会津 (11月22日)

11月22日に会津若松ワシントンホテルにおいて集落活性化県民討論会が行われ、私たち法政大学も今回初めて参加した。

討論会では「大学生の力が地域を変える！」をテーマに4大学(東北大学・宮城教育大学・宇都宮大学・法政大学)の5つのゼミ・研究室などが、県内の集落・地区での活動内容を発表した。この討論会では大学生が実際に現地に入り、高齢化・過疎化が進む集落・地区で学生が提言し、住民の主体的な地域づくりを推進することを目的に、各大学の代表者と受け入れ集落代表の皆さんで3時間に渡って熱い討論が展開された。

最初の発表グループは、川俣町小島地区で活動した東北大学建築空間学研究室であった。この研究室は、集落の事前調査の結果から、小学校の活用を中心にしながら、宿泊体験、住民のサロンのな施設としての機能整備、地域イベントなどを通じた地域活性化を提案していた。

また、郡山市湖南町横沢地区で活動した東北大学・宮城教育大学の仙台耕作放棄地研究会は、学生を巻き込んだ「風土のフード会」を実施することで、人々の集まる拠点づくりとしての可能性を模索し、横沢地区での家庭料理レシピを作成しているという。この研究会では、その後「湘南野菜作りの会」が発足されるなど、住民の活動に無理のないように配慮しつつ、できるだけ継続するように活性化の第一歩としての提案がなされていた。

西会津町上谷地区では、宮城教育大学の小金澤研究室の仙台いくね研究会が活動し、「いきがい拠点を目指して」をテーマに、地域住民の交流の場として「天空の郷」と称した旧小学校の活用を軸に、地域のネットワーク作りに力を入れていた。この研究会は、私たちと同様に学生が地域資源を見て回ってまとめたお宝マップとして活用していた。

只見町布沢区では、宇都宮大学の守友ゼミが発表を行い、空き家の利用、都会の学生の受け入れ、特産品づくりなどを提案し、そのための土台づくりとしての情報の共有、グリーンツーリズムをはじめとした外部の受け入れのための検討を考えるべき、という内容であった。

このように、各大学から多くの意見が出される中で、異なる部分もあれば、実に共通する部分も多くあるのだと感じた。

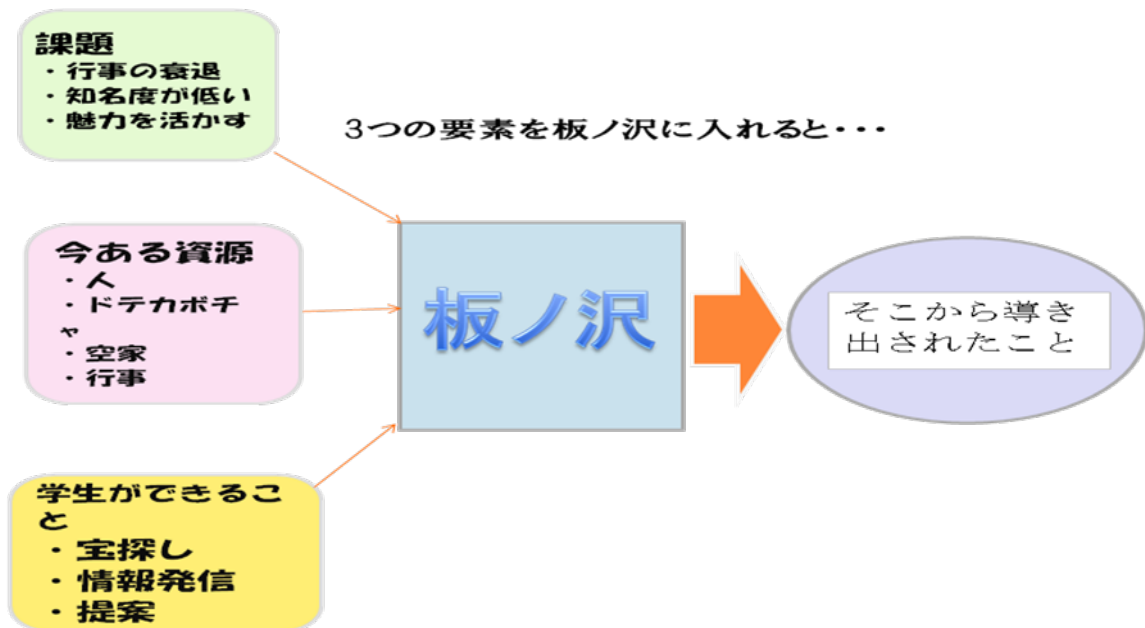
私たち法政大学は初参加であったが、初年度の板の沢集落での活動の1つの集大成として、板の沢集落の皆さんにもサポートしていただきながら、ゼミ生でまとめた地域活性化案を以下のような内容で発表した。当日は、板の沢集落の役員さんと学生4名(斉京・小森・青木・前田)が参加した。

また、会場には集落のお母さん方に用意して頂いた「板の沢土手かぼちゃ」とその煮付けを持参し、会場に飾るとともに、来場したたくさんの皆さんに煮付けを試食して頂いた。皆さんから、「おいしい。ほくほくしている」との声を寄せてもらい、今後の活用に向けた手応えを得ることができた。

<発表した内容>

～ステップ1～

まず、板の沢集落を知ってもらうために、板の沢の基本情報(位置・世帯数)を紹介した。そのうえで、課題となる問題点、元気塾でも活用した集落資源のお宝マップ、今学生にできることの順番で発表を展開していきました。



## ～ステップ 2～

ステップ1から私たちが考えた集落の魅力とは「**人！=マンパワー**」であるという結論に至った。いくら学生が動いても、実際にそこに住んでいる集落の人たちがやる気になって主体的に何かをはじめようとしなければ意味がないものになってしまう。

## 私たちが見つけた板の沢の宝！

キーワードは **人！=マンパワー！**  
集落の住民による**主体性**に始まる



- ①集落の問題点・課題を住民同士で共有
- ②自分たちで出来ることと出来ないことを把握
- ③目的を立てて必要な人材・資源・材料を確保

今回はその人材の一つとして学生が集落の**柱**になる。

## ～ステップ 3～

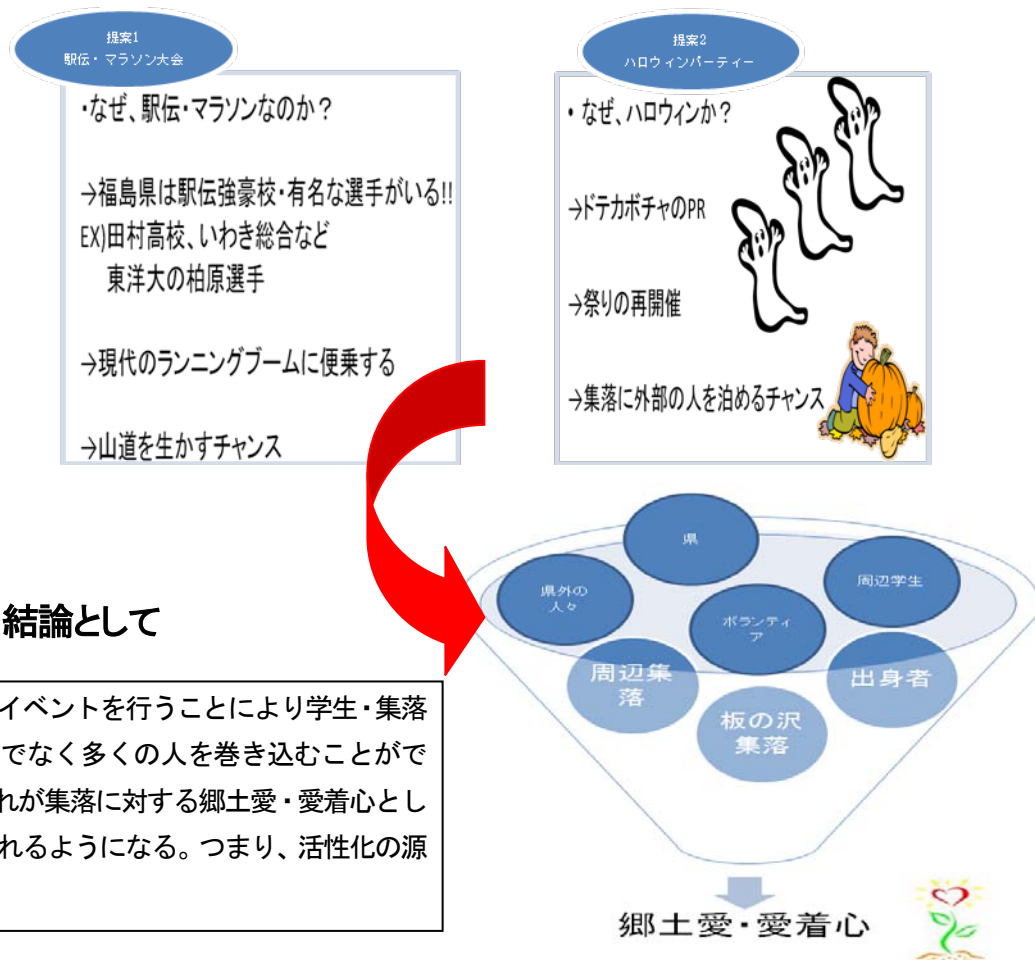
それでは、このマンパワーは一体どのようにすれば最大限生かすことができるか？そのためには、

- ① 学生はあくまで裏方に徹し、住民のやる気を引き出す。つまり、学生が集落の柱になる
- ② 集落内で問題・課題点を把握し、共有するための場を設ける
- ③ ゴールとなる目標を立て必要な人材・資源・材料をあぶり出す

この3点の基盤づくりが大事となる。そこで、私たちは「イベント」による地域活性化案の例を2つ考えました。

提案1：駅伝・マラソン大会を開催するというものである。現代の健康意識が高まっている現在、ランニングブームを活用しようという考えから発案された。板の沢集落の自然をフルに活用し、山道をコースの一つとして取り入れる。また、宿泊施設として空き家を活用して格安で利用してもらえるようにし、コースの途中には板の沢の伝統料理である「こづゆ」などを提供する。

提案2：ヒアリング調査でも多く意見があがった「板の沢土手かぼちゃ」をPRすることを目的として、ハロウィンパーティーを開催する。棚田にくり抜いたかぼちゃを飾ってライトアップしながら、子供たちを呼び込むきっかけとするというものである。



## 県民討論会で挙げた共通点

県民討論会では、異なる集落や地区での活動のために、それぞれ特徴は様々であり、一概に同じ物差しで比較できるものではないが、そこで抱える課題や今後の方向性などではいくつかの共通点を見つけることが出来、私たちも活性化を考えるにあたり大きな収穫を得ることができた。

どの集落・地区も高齢化率が高く、後継者の問題が集落存続の危機に直結している。

そこから生じる問題に対して、なんとか地域を盛り上げようとお宝マップ等を作成し地域資源を活用しようという動きがどの地域でも多く見られた。また、空き家・旧小学校を活動の拠点として外部の人のためだけでなく、地域の活動の場として利用してはどうかといった提案も挙げた。その結果、情報を共有することにもつながっていく。

また、新たな地域資源の創出を図るのではなく、地域に眠る潜在的な資源も活用し、お祭りやイベントを開催して、住民の人たちの暮らしに取り込んでいけるように学生が今後も交流を継続してサポートし、住民の主体性を促す。

つまり、このような共通項から、一つの集落・地域に限定したミクロ的視点だけでなく、広い考えを持った対策も今後必要になってくるのではないかと感じた。

高齢化率が50%前後またはそれ以上と高く20~30代の層が少ない  
(少子高齢化)

・仙台耕作放棄地研究会、図司ゼミ、仙台いぐね研究会、守友ゼミ他

空き家・旧小学校を利用

・東北大学建築空間学研究室、図司ゼミ、仙台いぐね研究会、守友ゼミ

情報の共有化

・東北大学建築空間学研究室、仙台耕作放棄地研究会、図司ゼミ、仙台いぐね研究会、守友ゼミ

今ある資源を活用

・東北大学建築空間学研究室、仙台耕作放棄地研究会、図司ゼミ、仙台いぐね研究会、守友ゼミ

伝統・郷土料理を活用

・仙台耕作放棄地研究会、図司ゼミ、仙台いぐね研究会、守友ゼミ

外部の人の受け入れ体制

・東北大学建築空間学研究室、仙台耕作放棄地研究会、図司ゼミ、仙台いぐね研究会、守友ゼミ

### Ⅲ 今後に向けて

#### 1. 冬の再訪問（2月5～7日）

今年度の板の沢集落における最後の活動として、集落の冬の生活を体験するだけでなく、学生と交流による集落の変化を知るために、2月5日～7日に再度ゼミとして集落を訪問した。初日は、集落に挨拶をして、その後改めてお宅訪問を通して、学生との交流を通して変わったこと、冬の生活についてなどの意見をお聞きした。また夜には、小正月に豊作を祈願する行事として「だんご刺し」を体験した。



図 14 だんご刺し体験

二日目(2月6日)の午前には、「かんじき」を履いて雪で広がった棚田の上を歩いたり、ムシロ織りを見学させていただいた。



図 15 雪体験・ムシロ織り見学

## 2. まとめ—地域活性化に必要な視点

今後に向けて板の沢がどうあるべきか考える上で、私たちはこれまで集落の方にお話を聞きいくつかの提案を挙げてきた。

昨年の夏から始まった活動も今年の冬で一区切りがついたことは間違いないが、学生も集落の方も当初の考え方に変化が表れてきたように思う。

それは、私たちにとって一番重要なことは何なのかを考えるようになったことである。今回の活動では、「もしかしたら学生のエゴを集落に押し付けてはいないだろうか？本当に望まれることが何なのか改めて見直してみよう」という点を心がけて進めてきた。確かにお互いの信頼関係は以前より深くなり、集落の方も学生の熱意に感化され、やる気になってくれた人も増えてきた。また、少しずつではあるけれど学生も集落のことを理解できるようになり、集落に活気を取り戻そうとイベントなどの提案も試みた。

しかし、「そもそも地域活性化とは何なのか」ということについて考えることを飛ばしてきてしまったことに気付くようになった。これまでは、「集落に若い人が来るにはどうしたらいいのか？」「何か産業は出来ないか？」「もっと集落のことを知ってもらう方法はないだろうか？」このような点が、地域活性化につながることであると信じてきた。このことに疑問を持たず進めてきていたのである。

そこで原点に立ち返って議論を重ねたところ、その手掛かりとなったのが県民討論会の中で、学生たちから出された「生きがい」という視点である。

この言葉こそ私たちが追い求めてきた地域活性化を考える一つの支えになるのではないか？先ほども述べたように、学生のエゴによる活性化では、この「生きがい」は生まれない。無理に集落の意見を一つにする必要もない訳である。そこに住んでいる一人一人考えが違ふのは当然であり、マイノリティーを排除することは押し付けでしかない。さらに、安易にイベントを開催してはどうかとも言えない。そこに集落の体力が考慮されなければならないし、単発で終わるイベントでは結果として集落の花道を飾ることになってしまう。

私たちがやることの全てにこの言葉が含まれることを常に忘れてはいけないのだろう。そこから初めて私たちの活動がスタートすると思っている。



## 活動前の学生の見解

集落に対するイメージが湧かずそこに暮らす人たちは一体どんな人なんだろう？

学生に出来ることは何であるか？

資源となる魅力はあるのか？

集落内で意見が一致していない？

若い人が少なく後継者問題も深刻で集落に活気がない。

## これまで考えていた方向性

何度か訪れることで信頼関係を構築する。

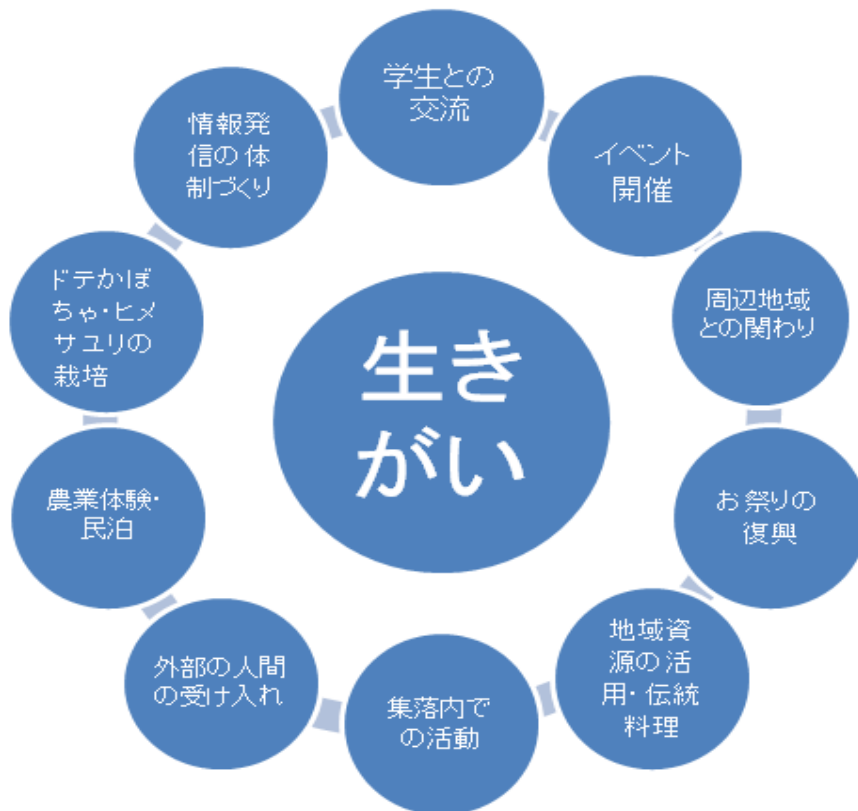
集落の主体性を促すためのサポート役として動く。

学生目線で今ある資源を活用し、お宝マップを作成する。

学生が来ることで刺激となって集落の話題となりお互いの意見を知る契機に。

お祭りやイベントを開催し、集落に活気を取り戻す。

## 生きがいを取り巻く構図



## IV おわりに

これまでの調査を通して、自分達に出来ることがあまりに微力過ぎるのではないかと痛感した。その中でも集落の方々が温かく迎え入れ、そして学生の意見を真摯に受け止めてくださったことで、逆に学生側が元気をもらったように思う。また、活動面でも集落の方からも呼び掛けてくれただけでなく、私たち学生のために料理を提供していただいたことなど、本当に感謝している。

集落に入る前は本当に不安が大きく、「一体どんな人たちなんだろう」「気持ちが沈んでいるのではないか」「学生に期待してないのではないか」などというマイナスイメージばかり浮かんでいた。しかし、全くそんなことはなく、むしろ出鼻を挫かれた印象から始まったことを覚えている。

今年の夏から始まった活動であるが、元気塾・県民討論会・冬の訪問と続けてきて、集落の方々との距離も少しずつ縮まったことで、建前だけではなく、本音の部分での話し合いが出来るようになったことは大変大きな進歩であると確信している。

県民討論会では、学生が緊張している中、集落の方に応援に来ていただいただけで、ずいぶん気持ちが落ち着き、討論の最中でも隣に区長さんが座っていることで気持ちの面で本当に心強かった。

また、板の沢に行つて以降、学生の間でもこれまで以上に話し合いの機会が増え、お互いにどう思っているのかを再確認でき、意見を出し合えるようになってきた。それがさらに、集落に還元されるという素晴らしいサイクルが築かれていった。

今回の冬での再訪問においても、集落の方から「今度は家族や友人を連れてきて」と言われた時には、調査という枠を超えた信頼の様なものを感じ嬉しく思った。

私たちはまだまだ、これからもこの集落と関わっていきたくと改めて思っている。そう思えるようになったことがこの集落の最大の魅力ではないだろうか。

## 謝辞

本報告書を作成するにあたり、調査にご協力・尽力くださった喜多方市板の沢集落行政区長の東条良男さんをはじめ、集落の皆さまには大変お世話になりました。

また、喜多方市役所企画政策課主任主査の佐藤義弘さん、福島県地域振興課主事の瓜生悦識さんをはじめ、喜多方市および福島県の職員の皆さまにも、サポートしていただき感謝しております。

このたびの調査から報告書作成に至るまで本当に多くの皆様にご協力いただいたこと改めてお礼を申し上げます。

平成 22(2010)年度  
大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業 報告書

### **喜多方市板の沢集落調査**

編者：法政大学現代福祉学部 関司ゼミナール  
(代表者 齊京知治)  
発行：2011 年 3 月